

---

# 会員登録

鄭文ういな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

会員登録録

### 【Nコード】

N2683BA

### 【作者名】

鄭文ういな

### 【あらすじ】

浅草でのある男たちの話。

その出会いは本当に些細なことだった。

私、筒倉雪人は、浅草寺の初詣の帰りに寄ったネットカフェが会員制であることを知り、嫌気が差していた。

手に提げている紙袋が、妙に煩わしい。中には人形焼が入っている。土産ではなく、家でひとりで食べるつもりだ。

ネットカフェはやめて、もう帰ろうと階段を下る。ちょうど下から人が上っているところだった。急用があるのか、駆けて階段を上っている。彼は腕の時計に目を奪われていて、私に気付かない。私がどうこうする前に、私と彼はぶつかってしまった。

私は紙袋を取り落とす。彼も紙袋を持っていたようで、段にふたつの紙袋が転がった。

彼は「すいません」と荒い息遣いで言い、紙袋を手にとってネットカフェの中に入っていった。

少々乱れたスーツを直し、紙袋を拾い、私は浅草駅へと向かっていった。

ドアを開けても、靴を脱いでも、出迎えてくれる人はいない。私はひとり暮らした。そしてフリーター、いや無職だ。いい加減職に就かないといけない二十三歳だ。

スーツを脱いで、椅子にかける。脱ぎながら紙袋を椅子に載せる。中身は人形焼十個入りの箱だ。

スーツのポケットに入れたままだった、おみくじの紙を読む。吉縁の欄に、突然の出会いがあると書かれていた。なんとなく、それをまたポケットに戻す。

部屋着を着てから、紙袋から箱を取り出した。だがその箱は、い

つもより大きかった。少々不思議に思つてよく見てみると、二十個入りと書いてあった。まさか、店の人が間違えたのだろうか。さらに紙袋の中には、見覚えのないものがあつた。手にとってみると、それは身分証明書だつた。私のものではない。

顔写真が添付されていた。肩までかかりそうな、捻じ曲がつた黒髪だ。気だるそうな目つきが、鈍くまた鋭い。

名前も記されていた。野畑<sup>のほたけん</sup>玄。脳内で何度かその名を反芻する。

翌朝、私はまた浅草へと向かつた。昨日と同じで、人でごつたがえしている。雷門の前の道路も、未だに車が通れないようになってる。

一隅のビルに入る。階段を上る。

昨日諦めたネットカフェが、ひっそりと佇んでいた。私は紙袋を持っていないほうの手で、そのドアを押す。

入つてすぐに、受付があつた。私はつい声を漏らす。

「あ……野畑さん？」

受付をしていたのは、身分証明書と同じ人だつた。

「はい？」

野畑さんが、不可解そうにそう聞き返す。私は紙袋を渡した。少し沈黙が流れて、野畑さんは「ああ」と頷く。

ラーメン屋で私たちは向かい合う。

「昨日はどうもすいませんでした」

「いえ、私もぼつとしていましたので」

麵をすする。口の中がほんわりと温かくなつた。

「人形焼、上司に食べられてしまいました」

野畑さんはそう言う。湯気が野畑さんの鬚に絡みついている。それを鬱陶しがることもなく、彼は豪快に汁を飲む。

「上司といつても、俺はフリーターなのですがね」

「あ、私もフリーターなんですよ。というよりも無職なんです」

「書類選考の時点で落ちる日々……」  
野畑さんは頬杖をつく。

私と彼の出会いは、そんな些細なことだった。

どの段階で、階段の何段目で彼に惹かれていたのかは分からない。私はネットカフェに会員登録した。金の都合上、家にコンピュータのない私は、そのネットカフェに通って就職情報を漁った。

野畑さんの退勤時間と合った日は、安いラーメンと一緒に食べにいった。互いを互いで慰め合った。きつと職に就ける。そう肩を叩き合った。

そんなある日のことだった。

秋葉原で電化製品を見ていると、野畑さんを見かけた。誰か、女の人と歩いている。

私は偶然の出来事に胸を躍らせ、彼に近づいた。

だが彼は少し迷惑そうに、少し会釈をするだけでいなくなってしまう。

まさか、隣にいる女の人は……。

気付けば私は、浅草寺にいた。恋は簡単に崩れる。そりゃあ、野畑さんは私を、恋愛対象に見てはいなかったのかもしれない。私のことを、少し奇怪な人として見ていたのかもしれない。

ふとポケットに手を入れると、ぐしゃぐしゃとしたものがあつた。それを取り出してみても、それがおみくじの紙であると分かる。

突然の出会いがあるでしょう。

その辺のゴミ箱に捨てた。

その瞬間、突然肩を掴まれる。振り返ると、掴んだのは野畑さんだった。

「ここにいたのか」

息が荒い。走っていたのだろうか。

「放してください！」

未だに肩に載っているものを、私は荒々しく振り落とす。

「おい雪人」

「野畑さんは」

私は言う。ゴミ箱に沈んでいった紙を眺めて。

「野畑さんは、私のこと嫌いなんですよ」

沈黙。野畑さんは、空をゆっくりと眺めて、そのまま言った。

「俺、就職できるんだ。今日俺と歩いていた女は、これからの段取りを教えにきたっ—か、会社の人間だ」

だから残念だが、と野畑さんは続ける。

就職できたから、残念ながら私との縁は終わり。きっとそう言うつもりなのだろう。言いあぐねているのか、また沈黙が過ぎる。

風が吹いた。それに押されるように、野畑さんがこちらを見据える。

「残念ながら、俺はお前が大好きだ」

はれて私と彼は、会員になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2683ba/>

---

会員登録

2012年1月6日22時54分発行